

杜牧の邊塞を詠じる詩について

——その作品集の編纂、及び「河湟」の詠法を手がかりに——

高橋 未來

一、はじめに

中唐から晩唐にかけて活躍した杜牧（八〇三〜八五二）、字は牧之は、いわゆる「邊塞詩人」ではない。それは、杜牧が量的にさほど多くの「邊塞詩」を残さなかった、という事實に起因するばかりではない。王翰や王之渙のように、邊塞詩を僅かしか今日に傳えていない詩人がむしろ「邊塞詩人」と認識されている事實を想起すれば、このことは理解しやすいだろう。つまり杜牧の「邊塞詩」は、中國邊塞詩史という観点から見た場合、その存在意義を讀者に訴えかけるような、突出したインパクトと輝きとを持っていないかに映る。その意味において、杜牧は確かに「邊塞詩人」とは言い難い。

しかし、ひとたび見方を變えて、「邊塞」という主題もしくは素材が杜牧にとっていかなる意味を持つのか、と問い直す時、そこには全く別の價值が立ち現われてくる。

周知の通り杜牧は、「風流才子」たる華やかなエピソードを残すその一方で、經世濟民の理念を強く抱き、政治問題に關して多く發言し

た詩人として知られている。中でも『孫子』の注釋や、名高い論策「罪言」などに見える様に、杜牧が軍略家としての自己に大きな自負を抱いていたことは、これまでもしばしば論じられてきた。更に杜牧の生きた中晩唐の時代には、國內では藩鎮の叛亂が、國外では異民族の侵略が、國家を脅かす大問題となっていた。従って杜牧は、その軍略家の能力を發揮する機會としても、「邊塞」に對して大いに關心を抱いていたわけである。

私見では、杜牧における「邊塞」とは、詩人としての杜牧の個性や志向を最も鮮明に映し出す、鏡のごとき重要な主題もしくは素材の一つである。

そこで本稿では、この新たな観点から杜牧の「邊塞」を詠じる作品に分析を加え、杜牧の詩歌觀ないしは詩人としての個性について論じてみたい。

なお、杜牧作品のテキストとして『樊川文集』（陳允吉點校、上海古籍出版社、一九七八年九月）を使用し、清・馮集梧注『樊川詩集注』（上海古籍出版社、一九七八年五月）も適宜参照する。

二、杜牧の邊塞詩における傾向

(1) 樂府系邊塞詩

前述のように、杜牧は異民族の侵略に對して強く關心を抱いていたが、その生涯を通して從軍や國境附近の幕府勤務、または彼の地への旅行という經驗それ自體は無かった。従つて杜牧には、その實體驗、或いは自らの目で見た邊塞を描く詩は、もとより無い。とすれば、杜牧が邊塞を描く方途としては、既成のモデル、すなわち漢魏六朝以來の傳統的手法を用いた邊塞詩をまづモデルとして描く事にならう。

そこで杜牧詩文の作品集『樊川文集』二十卷、『樊川外集』一卷(以下『外集』と略稱す)及び『樊川別集』一卷(以下『別集』と略稱す)を見てみると、注目すべきことに、そのような傳統的手法による邊塞詩は存在するものの、そこには邊塞詩ジャンルの中核をなす「從軍行」や「塞上曲」といった新舊の樂府題が、一首も收められていない事に氣づくのである。

但し杜牧には、そもそも樂府自體が少なく、『樊川文集』、『外集』、『別集』全四七五七首のうち、樂府は三首を數えるに止まる。中晚唐期の邊塞詩群においても樂府の邊塞詩が主流をなす中において、杜牧のこの狀況は特異にも感じられよう。ならば杜牧と同時代の他詩人における、樂府、及び樂府系邊塞詩の制作狀況はどのようなものなのだろうか。

例えば杜牧と親しく交流を持った①張祜(七九二〜八五三頃)は、北宋・郭茂倩撰『樂府詩集』に樂府三十八首を收め、そのうち「入關」他六首の邊塞詩を含んでいる。②李商隱(八一三〜八五八)の樂府は、『樂府詩集』に九首を收め、そのうち「王昭君」一首が邊塞と關連す

杜牧の邊塞を詠じる詩について

る樂府題である。③許渾(七八八〜八五四頃)には、詩話の類にて高く評される「塞上曲」があるものの、樂府はこの邊塞詩一首のみである。杜牧と許渾とは詩風の似ている詩人であるだけに、樂府作品の寡なさは杜牧と結果的に妙通しており、興味深い。

總じて、樂府の制作と、その中でも邊塞を主題とする樂府の制作とは、詩人の關心の所在やその個性に基づくことが確認されよう。

翻つて杜牧の樂府は三首。『樂府詩集』卷五十八琴曲歌辭所收の「別鶴」(『樊川別集』所收「別鶴」と、同書卷六十六雜曲歌辭所收の「少年行」(『樊川文集』卷二。以下卷數のみ記す)、同じく「少年行」(卷四)である。

そのうち五言排律「少年行」(卷四)には、遊俠の若者が邊塞へ出征する場面がある。王維、王昌齡等の作例にもあるように、元々「少年行」には邊塞の存在が多く見られる。但し杜牧の詩についていえば、表現の中心は若者の遊俠ぶりにあり、邊塞はその象徴として詠み込まれるに止まっている。従つて杜牧は、中晚唐の詩人の中で較べてみて、とりわけて樂府自體と、邊塞を主題とする樂府とを積極的に制作しなかったと見てよいだろう。

(2) 樂府以外の邊塞詩

次いで、杜牧作品中、同じく傳統的手法に則した、樂府以外の邊塞詩を内容別に示してみたい。そこからは、興味深い幾つかの傾向が浮かび上がってくるのである。

《邊塞を主題とする詩》

「河湟」(卷二)

《邊塞の幕府に赴任する人へ贈る詩》

「夏州崔常侍自少常亞列出領麾幟十韻」(卷二) 五言排律

《黨項との戦鬪にて戦死した人物を悼む詩》

「閩慶州趙縱使君與黨項戰中箭身死長句」(卷二) 七言律詩

《國境警備へ向かう兵士の心情を詠う詩》

「并州道中」(別集) 五言律詩

「偶題」二首 (外集) 五言律詩

《邊塞にいる旅人の望郷を詠う詩》

「邊上聞胡笳」三首 (別集) 七言絕句

「邊上晚秋」(別集) 七言絕句

「遊邊」(別集) 七言絕句

《西域に縁ある古の人物の姿を詠う詩》

「題木蘭廟」(卷四) 七言絕句

「青塚」(別集) 七言絕句

《邊塞へ出征する夫を想う閨怨詩》

「閨情代作」(外集) 七言律詩

「代人作」(外集) 五言排律

「秋夢」(別集) 五言律詩

この杜牧の非樂府系邊塞詩からは、次の三點が特色として窺える。

- ①、内容上、邊塞詩の主たるテーマというべき從軍に關する詩は、二首のみである。かつ、右に擧げた詩は總じて内容、詩風ともに穩やかなものといつてよく、邊塞での戦鬪は描かれていない。すなわち杜牧作品集には、例えば李白「戰城南」のような邊塞での戦鬪を描く詩は、一首も殘されていないのである。

②、《邊塞へ出征する夫を思う閨怨詩》三首が『外集』、『別集』の詩であることに着目したい。というのは、『樊川文集』所收の閨怨詩全九首において、閨中の女性が思いを馳せる夫または戀人の行く先は、艱難辛苦の暗いイメージが伴う遠征ではないのである。女性の思慕する對象は、瀟洒・多情な若者である事が多い。

③、最も注目すべき傾向として、右に擧げた邊塞詩、特に狹義の邊塞詩は、『外集』及び『別集』に偏在しており、『樊川文集』には殆ど收められていないことが認められる。

①の特色からは、その理由として、杜牧は戰爭の慘狀を生々しく表現することを志向せず、また反戰派ならぬ主戰派的な姿勢を持っていた事が考えられる。杜牧の詩風は、南宋・陳振孫撰『直齋書錄解題』卷十六に「牧才高俊邁不羈、其詩豪而艷、有氣概、非晚唐人所能及也」(牧才は高くして俊邁不羈、其の詩は豪にして、艷、氣概有り、晚唐の人の能く及ぶ所に非ざるなり)と表されるように、豪放さと艷麗さという、相反する二面を持つものである。いわば、その「豪」の部分がよく表れた結果と位置づけられるだろう。

また②の特色からは、瀟洒な詩風が讀み取れよう。いわば杜牧作品の「艷」の部分が現れた結果と位置づけられる。

③の特色については、更なる説明を要する。以下に、『樊川文集』と『外集』、『別集』という三集の編纂經緯に即して、その意味するところを明らかにしてゆきたい。

三、杜牧作品集の編纂經緯について

杜牧の甥の裴延翰が記す『樊川文集』序に據ると、杜牧は死去するおよそ一年前に、祖父の杜佑が樊川に建てた別莊を修築し、そこで親

しい者たちと遊んだという。そのある宴たけなわの席にて、杜牧は裴延翰に次のように告げた。

司馬遷云、自古富貴、其名磨滅者、不可勝紀。我適稚走於此、得官受俸、再治完具、俄及老爲樊上翁。既不自期富貴、要有數百篇文章、異日爾爲我序、號樊川集、如此顧樊川一禽魚、一草木無恨矣、庶千百年未隨此磨滅邪。

(司馬遷云う、『古より富貴にして、其の名の磨滅する者、勝けて紀すべからず』と。我は適たま稚きより此に走り、官を得て俸を受け、再び治めて完具するに、俄に老いて樊上の翁と爲るに及ぶ。既に自ら富貴たるを期せざるも、數百首の文章を有たんとを要むれば、異日爾は我が爲に序して、『樊川集』と號せよ、此くの如く樊川の一禽魚、一草木を顧みれば恨み無からん、庶わくは千百年にして未だ此に隨いて磨滅せざらんことをや)と。

引用された司馬遷の言は、任安に宛てた書簡(『文選』卷四十一「報任少卿書」)にて、宮刑の屈辱を受けた後にもなお生きる據り所として『史記』執筆の動機を語った、名高い一節である。

司馬遷がこれに續けて孔子や屈原等の著作の契機を「此人皆意有鬱結、不得通其道、故述往事、思來者」(此の人皆任意に鬱結する有るも、其の道を通ずるを得ず、故に往事を述べ、來者を思う)と記す、いわゆる「發憤著書」の思想は、以後脈々と引き繼がれてゆく傳統的士大夫觀である。それは杜牧においても、平生より抱き續けた士大夫觀であり、文學觀であつた。

この時杜牧は、幼少の記憶を想起させる場所で人生を振り返り、その締め括りとなる詩文集に思いを致す。そして自作の詩文の編纂を裴

杜牧の邊塞を詠じる詩について

延翰に頼んだという。杜牧は古の賢者と同様に、詩文が自身の生きた意義を代辨するものと意識し、それを後世に伝えることを強く願つていた事が判る。

但し、續く裴延翰の序には「明年冬：始少得恙、盡搜文章、閱千百紙、擲焚之、纔屬留者十二三」(明年の冬：始めて少しく恙を得て、盡く文章を搜し、千百紙を閱するも、擲てて之を焚き、纔かに留むるに屬する者は十二、三のみ)とある。杜牧は後に病を得てから、裴延翰に任せる前に自ら詩文を點檢し、その二三割を残すのみで、あとの詩文は燒却したのであつた。自分の詩文が後世に傳わることを意識した杜牧は、それ故に、遺すべき詩文の選定をしたのであろう。

そこで、幼少より杜牧に詩文の手ほどきを受けていた裴延翰は、手元に留めてあつた杜牧の詩文を補い、杜牧の死去から四年後(大中十年(八五六))に『樊川文集』として編纂し終えたのであつた。

それに次ぐ『外集』の編纂經緯に關しては、未詳の點が多い。明の胡震亨撰『唐音戊籤』卷一に「其外集詩唐人所編、更其焚棄之餘」(其れ外集の詩は唐人の編む所なり、其の焚棄を更るの餘り)と記すのに據れば、『樊川文集』に漏れた作品を後に唐代の人が收集して『外集』を編んだということになる。

次の『別集』には、杜陵の田概なる人物が記す北宋・熙寧六年(一〇七三)の序があり、そこに「舊傳集外詩者又九十五首、家家有之。予往年於棠郊魏處士野家得牧詩九首、近汶上盧訥處又得五十篇、皆二集所逸者。其『後池泛舟宴送王十秀才』詩、乃知外集所亡、取別句以補題」(舊く傳うる集外の詩は又た九十五首、家家に之有り。予は往年棠郊の魏處士野の家に於いて牧の詩九首を得、近ごろ汶上の盧訥の處に又た五十篇を得たり、皆な二集の逸せし所の者なり。其れ『後池

泛舟宴送王十秀才」詩は、乃ち外集の亡うしないし所にして、別句を取りて以て題を補うを知る」と記されている。この記述に據れば『別集』とは、『樊川文集』と『外集』から漏れ、世に傳わっていた詩を収集したものである。³³⁾

以上から明らかなように、『樊川文集』所收の詩とは、杜牧が後世に知友を求めんとする想いのもとに遺した作品と、裴延翰が補った作品とから成るものである。従つて、他方の『外集』・『別集』二集に偏在する邊塞詩とは、杜牧のオリジナルであるか否かに拘らず、杜牧が自作として後世に遺すことを意圖していなかつた作品群、といえるわけである。

ならば、杜牧が意識して遺した詩とは、意識して詠じた「邊塞」とは、如何なるものなのか。以下に、その具體的な手がかりとして、吐蕃に占領された西域の地を表す「河湟」という語に即して検討してゆきたい。「河湟」こそは、正に杜牧が意識して詠じ、意識して遺した「邊塞」と目されるからである。

四、杜牧の河湟を詠じる詩

河湟とは、『新唐書』卷二一六下・吐蕃傳に「湟水出蒙谷、抵龍泉與河合。…世學謂西戎地曰河湟」（湟水は蒙谷より出で、龍泉に抵りて河と合す。…世は擧げて西戎の地を謂いて河湟と曰う）とあるのに據れば、青海近くに源流のある湟水が、黄河と交わる邊りの稱である。但し實際には、安史の亂（七五五—七六三）を機に吐蕃に占領された、黄河と湟水とが流れる河西・隴右節度使一帯（甘肅省より青海省東部一帯）を廣く指したようである。³⁴⁾

肅宗至德二載（七五七）十月、吐蕃は西平郡（青海省西寧市）を占

領したのを皮切りに、徳宗建中二年（七八一）までに河湟一帯を全て占領するに至った。それは懿宗咸通二年（八六一）に歸義軍節度使張義潮が涼州を奪回し終えるまで、實に約百年の長きに亘るのである。

ここで特に興味深いことがある。『全唐詩』においてこの「河湟」の語を詩題或いは詩中に詠み込んだ詩は、杜牧が七首を數え、これは唐代詩人の中で最も多いのである。無論、河湟を「河隴」など他の語で表したり、または地名を表さずして彼の地を詠じる詩は、枚舉に暇の無いほどではある。しかしながら、杜牧が「河湟」を詩中に多く詠み込んでいたという事實は、いかに彼の地に深く關心を寄せていたかという表れであろう。

次に掲げる「河湟」（卷二）には、杜牧が河湟をどのように捉えていたかが、端的に表わされている。すなわち河湟は、「奪回されぬままの地」として、批判と嘆きのうちに綴られているのである。

元載相公曾借箸	元載相公曾て箸を借り
憲宗皇帝亦留神	憲宗皇帝亦た神を留む
旋見衣冠就東市	旋 <small>たち</small> ち見る 衣冠の東市に就くを
忽遺弓劍不西巡	忽ち弓劍を遺して 西巡せず
牧羊驅馬雖戎服	牧羊 驅馬 戎服と雖も
白髮丹心盡漢臣	白髮 丹心 盡く漢臣なり
唯有涼州歌舞曲	唯だ涼州歌舞の曲の
流傳天下樂閑人	天下に流傳して閑人を樂しましむる有るのみ

（河湟の地は、宰相の元載が嘗てその奪回を畫策し、憲宗もまた常に留意する所だった。しかしすぐに元載が處刑されるのを見ることになり、すぐに憲宗が崩御して、西方へ遠征することはなかつた。）

たのだ。河湟に住む漢民族は、羊と馬を放牧しながら胡服を着せられていたけれど、蘇武のように白髪になっても忠誠心を懐き続ける唐の臣下なのだ。ところがそれをよそに、かの地より傳來した「涼州」曲が天下に廣く傳わって、安穩とした人々を楽しませているだけとは。

前半第一句と三句、第二句と四句が隔句對。第一・三句の元載（七七七七）は、代宗朝の宰相である。「借箸」とは畫策することを用う。代宗大曆八年（七七三三）、吐蕃の邈寧侵攻の際、元載は西州刺史〔新疆自治區吐魯番附近〕赴任の經驗に基づいて、討伐の策略を奉じた。そこで朝廷は攻撃の準備を整えたものの、誹謗を受けたために攻撃を中止したのであった。

第三句の「東市」は、『漢書』卷四十九鼂錯傳に「錯衣朝衣斬東市」（錯は朝衣を衣て東の市に斬らる）とあるのを踏まえる。後に元載は、その恣意な振舞いによって自害させられた。

第二句は、憲宗が常に領土の圖を見渡しては、河湟を吐蕃から奪回したいと盛んに願っていたものの、その餘裕がなかったことをいう。第四句の「遺弓劍」は、帝王の逝去を意味する婉曲表現であり、詩中では憲宗が逝去したことをいう。

頸聯は、李陵と蘇武の故事を踏まえている。「戎服」とは、『漢書』卷五十四李陵傳に、將軍霍光と上官傑とが李陵を匈奴から召還しようとし、使いを送って打診したところ、「陵墨不應、孰視而自循其髮、答曰『吾已胡服矣』」（陵墨して應えず、孰視して自ら其の髮を循で、答えて曰く『吾は已に胡服たり』と）とある。また「白髮」の語については、同蘇武傳に「武留匈奴凡十九歲、始以彊壯出、及還、須髮盡

杜牧の邊塞を詠じる詩について

白」（武の匈奴に留むること凡そ十九歲、始めは彊壯たるを以て出づるも、還るに及ぶや、須髮盡く白む）と記す。

尾聯の「涼州歌舞曲」とは、玄宗の開元年間涼州府の都督が彼の地の歌謠として朝廷に献上した曲である。

一首全體は、前半四句と後半四句の二部から構成されている。前半は、河湟の歴史的な經緯について典故を用いて説明する、説理的な部分である。それに對して後半では、河湟に住む漢人の心中と、肝心の唐王朝の富貴な人々の心中との乖離という、情緒を主として詠じている。詩の末尾では批判と嘆きを訴えているが、前半四句がインパクトを持つ故に、句末に流れる情緒のみに止まらぬ邊塞詩となっている。

會昌五年（八四五）二月、朝廷は、吐蕃の衰弱を機に河湟を奪回しようとして、視察官を派遣した。『資治通鑑』卷二四七武宗會昌四年二月の條に「朝廷以回鶻衰微、吐蕃内亂、議復河・湟四鎮十八州。乃以給事中劉濛爲巡邊使、使之先備器械糗糧及訶吐蕃守兵衆寡」（朝廷は回鶻の衰微し、吐蕃の内亂せるを以て、河・湟四鎮十八州を復せんことを議す。乃ち給事中劉濛を以て巡邊使と爲し、之をして先に器械糗糧を備え、及び吐蕃の守兵の衆寡を訶らしむ）とある。杜牧はそれに深い感慨があり、武宗の徳を稱えて七言古詩「皇風」（卷一）を詠じた。

仁聖天子神且武	仁聖天子神にして且つ武たり
内興文教外披攘	内に文教を興して外に披攘す
以德化人漢文帝	徳を以て人を化す漢の文帝
側身修道周宣王	身を側だてて道を修む周の宣王
泣蹊巢穴盡空塞	泣蹊巢穴盡く空塞し
禮樂刑政皆弛張	禮樂刑政皆な弛張す

何當提筆待巡狩 何か當に筆を提して巡狩を待ち
前驅白旆弔河湟 白旆に前驅して河湟を弔うべき

※原注に「音は剛」と記す

(仁)聖天子たる武宗は、嚴かであつ勇ましく、國內では禮樂によつて人民を感化し、國外では領土を廣げる。それはまるで、徳によつて人民を感化する漢の文帝のようであり、身を慎んで道を修めた周の宣王のようだ。獸の足跡のある道から隠れ家まで残らず塞ぎ、儀禮、音樂、刑法、政令は、全て寛容と嚴重とをもつて行われてゐる。ああ、何時になつたら私は筆を持って天子の巡狩を待ち、天子の前を驅けて白い吹流しをたなびかせ、河湟の遺民への弔いをしに行けるのだろうか。

第一句の「仁聖天子」とは、會昌二年四月、武宗に「仁聖文武至神大孝皇帝」の尊號が献上されたことによる。第三句の「漢文帝」とは、『漢書』卷四文帝紀贊に「専務以德化民」(専ら徳を以て民を化すに務む)とあり、第四句の「周宣王」は、『毛詩』大雅・雲漢序に「宣王承厲王之烈、内有撥亂之志。遇災而懼、側身修行、欲銷去之」(宣王承厲王之烈を承け、内に撥亂の志有り。災いに遭いて懼れ、身を側だてて行を修め、之を銷し去らんと欲す)とある。第五句の「述」は「歌述」(『說文解字』述部)の意味。

この詩の主題は、武宗の徳の謳歌であるが、そのみに止まらず、尾聯で「武宗の先拂いとなつて河湟の地を奪回しに行きたいものだ」と自身の壯志を力強く詠い上げ、颯爽とした餘韻を残している。

ここで、河湟の奪回という點で句が結ばれていることに着目したい。武宗が河湟を奪回できるか否かというところに、作者杜牧の意識が置か

れており、またそれに借りて、果たすべき河湟奪回という杜牧の宿願が、直截に述べられている。いかに深い宿願であつたかが窺われよう。

嘗て突厥討伐の手柄を立てた將軍史憲忠を詠じる詩「史將軍」二首其(一)(卷一)においても、やはり河湟は「奪回すべき領土」として詠まれている。

(前四句略)

河湟非内地 河湟は内地に非ず

安史有遺塵 安史は遺塵有り

何日武臺坐 何れの日か武臺に坐して

兵符授虎臣 兵符 虎臣に授けられん

(河湟はわが王朝の領土ではないし、國內でも安史の亂以後、藩鎮の叛亂という火種が残っている。何時になつたら、漢の武帝が匈奴討伐の軍を送り出したという武臺に坐して、天子の討伐の命を記した割り符が、勇猛なあなたに授けられることだろう。)

宣宗大中三年(八四九)二月、吐蕃が投降し、とうとう河湟の一部(秦州等三州及び七關)が返還されることとなつた。杜牧は前年の大中二年より司勳員外郎兼史館修撰として朝廷勤務にあり、河湟奪回の喜びを國家の中樞にて體驗し得たのであつた。

この際に杜牧は、宰相白敏中等の、宣宗への奉贈詩に奉和して「奉和白相公聖德和平、致茲休運、歲終功就、合詠盛明、呈上三相公長句四韻」(白相公の聖德和平、茲の休運を致し、歲終りて功就り、合わせて盛明を詠するに奉和して、三相公に呈上す長句四韻)(卷二)を詠じた。

行看臘破好年光
萬壽南山對未央
點曼可汗脩職貢
文思天子復河湟
應須日御西巡狩
不假星弧北射狼
吉甫裁詩歌盛業
一篇江漢美宣王

行くゆく看んとす 臘破れ年光好ろしきを
萬壽 南山 未央に對す
點曼可汗 職貢を脩め
文思天子 河湟を復す
應に須らく 日御西のかた巡狩すべし
星弧 北のかた狼を射るを假りず
吉甫 詩を裁して盛業を歌い
一篇の江漢 宣王を美む

また同年八月、河湟の住民だった漢人千餘人が宮城を訪れた。宣宗は延喜門の樓にて彼らを慰撫し、彼らは歡喜に沸いた。『資治通鑑』卷二四八宣宗大中三年の條に「八月乙酉、河・隴老幼千餘人詣闕。己丑、上御延喜門樓見之、歡呼舞躍、解胡服、襲冠帶、觀者皆呼萬歲」(八月乙酉、河・隴の老幼千餘人闕に詣づ。己丑、上は延喜門の樓に御して之を見るに、歡呼舞躍し、胡服を解き、冠帶を襲いて、觀者は皆な萬歲を呼ぶ)と記す。その様子を目にした杜牧は「今皇帝陛下詔徵兵、不日功集、河湟諸郡、次第歸降、臣獲觀聖功、輒獻歌詠」(今皇帝陛下一たび徵兵を詔してより、日ならずして功集い、河湟の諸郡、次第に歸降す、臣は聖功を觀るを獲て、輒ち歌詠を獻ず)〔卷二〕を宣宗へ奉贈する。この詩は、現存する作品中で唯一、杜牧が皇帝へ奉贈した詩である。杜牧が詩に繰り返し詠じた河湟の奪回がとうとう果たされたわけであり、その強い關心と喜びゆえに奉贈に至ったのであろう。

捷書皆應睿謀期 捷書 皆な睿謀の期に應じ

杜牧の邊塞を詠じる詩について

十萬曾無一鏃遺 十萬 曾ち一鏃の遺す無し
漢武慙誇朔方地 漢武 朔方の地を誇るを慙ぢ
宣王休道太原師 宣王 太原の師を道うを休む
威加塞外寒來早 威は 塞外に加わりて寒の來たること早く
恩入河源凍合遲 恩は 河源に入りて凍の合すること遅し
聽取滿城歌舞曲 聽取せん 滿城歌舞の曲
涼州聲韻喜參差 涼州の聲韻 喜ぶこと參差たり

更に、この頃に江西觀察使に赴任した、姉の夫の裴儔(裴延翰の父)へ贈る「中丞業深韜略、志在功名、再奉長句一篇、兼有諒勸」(中丞業は韜略を深くし、志は功名に在り、再び長句一篇を奉じ、兼ねて諒勸する有り)〔外集〕では、詩の末尾で次のように詠じている。

要君嚴重疎歡樂 君に要む 嚴重にして歡樂を疎んぜよ
猶有河湟可下鞭 猶お有り 河湟の鞭を下すべきこと
(中丞殿よ、どうぞ自重して下さい。河湟の地は一部を取り戻したとはいえ、まだ鞭を降ろすように厳しく見張らないと、残る土地が、どうなるか分かりませんから。)

以上に挙げた詩において、河湟とは、全て「奪回すべき邊塞地」という一定の方向のもとに詠じられていることが判る。

「河湟」詩では、彼の地が、才略ある宰相によっても中興の主たる憲宗によっても奪回できぬまま現在に至る場所として描かれている。「皇風」詩では、自身が先驅けとなっても河湟を奪回したいという壮志を述べ、武宗に河湟奪回を實現することを期待している。そして杜牧の念願であった河湟の奪回がようやく果たされた際には、

杜牧は恐らくは生涯でただ一度、皇帝への奉贈詩を詠じて、その喜びを表現した。と同時にまた、残る領土の奪回にも強く關心を抱いていた。このように、杜牧における河湟とは、現實的政策の對象として詠じられ、常にその奪回に關心を寄せ続けた場所であったことが理解されよう。

五、杜牧における邊塞—河湟—

以上までに見てきた杜牧の「河湟」を詠じる詩から、改めて杜牧が邊塞という題材に向き合う際の表現姿勢、描寫傾向を検討したい。杜牧が遺すことを意識した「邊塞詩」とは如何なるものであり、それは意識しなかった『外集』・『別集』所收の詩と較べて如何に異なるのか。更にそこから、杜牧の如何なる詩歌觀や詩人としての個性を確認するのだろうか。

(1) 同時代詩人の邊塞詩

ここで、杜牧と同時代の詩人である、顧況の子・顧非熊（約七九七—？）の七言律詩「出塞即事」二首其の二（『全唐詩』卷五〇九）を例に取り、比較を交えることにしたい。その詩中には杜牧作品との相違点が見いだされ、杜牧が「邊塞」という題材に向き合う態度を相對的に把握するのに適するからである。

賀蘭山便是戎疆 賀蘭山は便ち是れ戎疆
此去蕭關路幾荒 此より蕭關を去れば路 荒るるに幾し
無限城池非漢界 無限の城池は漢界に非ず
幾多人物在胡鄉 幾多の人物 胡郷に在るや

諸侯持節望吾土 諸侯節を持ちて吾が土を望み
男子生身負我唐 男子生身我が唐を負う
迴望風光成異域 迴望す 風光 異域と成るを
誰能獻計復河湟 誰か能く計を獻じて河湟を復せん

（あの賀蘭山〔寧夏ウイグル自治區銀川付近。靈武節度使の管轄區と、吐蕃の占領する一帶との境〕が吐蕃の地との境界で、ここから蕭關〔甘肅省固原。昔の四關の一〕を抜けると、道は荒涼としてくる。無限に續く城壁とそれを取り巻く濠とは、我が唐王朝の領土ではなく、どれ程の漢人がこの地にいることか。諸侯は出征が命ぜられた割り符を持って嘗ての領土を眺め、若者は自身の體で唐王朝を一身に背負う。遙かに眺める、吐蕃の地となったその景色を。一體誰が優れた策略を献上して、河湟の地を奪回できるのだろうか。）

(2) 「河湟」の語が持つイメージ

「出塞即事」の舞臺は、出征兵士の目を通して描かれるいわば想像上の邊塞世界であり、詩中の「河湟」は、兵士の目の前に廣がる廣大な邊塞の地を象徴する語である。第二節（2）に前述した通り、杜牧にも、このような顧非熊の詩と同様に、傳統的手法を用いて想像の邊塞を描く詩は存在する。但しその一連の詩は、杜牧が闊して一度は捨てた作品を収める『外集』、『別集』に偏在していた。

翻って『樊川文集』に収める「河湟」を詠じた詩はといえば、「河湟」詩以外の詩において、詩中には邊塞のイメージを喚起する胡笳や烽火、ひいては兵士の姿が詠み込まれていない。河湟は想像上の空間ではなく、奪回されねばならぬ領土の一部、という、ひたすらに現實

的政策的対象として言及されている。

すなわち、杜牧の邊塞を詠じる詩を總體的にみると、『樊川文集』においては詩中に「河湟」の語を詠み込み、邊塞を現實的に描く。一方、『外集』と『別集』においては「河湟」の語を含まず、邊塞を想像の世界として描く。兩者には、そのような截然たる差異が認められるのである。

この兩者の差異を生じる要因は、①詩の構造（外的要因）と、②杜牧の詩作における志向（内的要因）との二點に在ると思われる。

①詩の構造については、『樊川文集』所收の詩は、河湟奪回の際などの具體的な時宜、または特定の相手へ詩を贈るといった個別的な場面に即しており、その詩中に河湟を素材（部分的・個別的なもの）として詠み込む、という構造を持っている。他方の『外集』と『別集』所收詩においては、邊塞それ自體を主題（全體的・統一的なもの）として用いている。

無論、『樊川文集』所收詩にも、邊塞自體を主題とする詩が存在する。第四節に挙げた「河湟」詩がそれである。但しそこに描かれる邊塞は、完全な想像の世界とは少しく異なっているといえよう。つまり、河湟の歴史的経緯が詩の半分を占めるために、詠史詩に似て議論めいた風格を備え、顧非熊の詩の如く邊塞の空間を描くいわゆる「邊塞詩」の系統には収まりきれないように感ぜられるのである。

②詩作における志向は、樂府系邊塞詩の寫作という點が鍵となる。第二節に述べた通り、杜牧は同時代詩人の中でもとりわけ樂府系邊塞詩を制作しなかった。すなわち杜牧は、樂府題を用いるか否かに拘わらず、樂府系邊塞詩を持つ「イメージ上の邊塞」という描き方自體を良しとせず、故にその傳統的手法に即した邊塞詩を、制作はしても遺

杜牧の邊塞を詠じる詩について

すことは意圖しなかった、と思われる。そうして一度は捨てた作品が、後に結果として『外集』、『別集』に収録されたのであろう。

(3) 視點の所在

松浦友久「樂府・新樂府・歌行論―表現機能の異同を中心に―」²⁸は、古樂府の表現機能に「視點の三人稱化、場面の客體化」という點があると論じ、その意味を「古樂府系の作品では、一般に、作者の一人稱的な個別的視線は捨棄され、共有化された第三人稱的な視點から一首全體が描寫される。そして、そのことよって、作品中の場面は、作者個人の主體的な體驗の場としてでなく、いわば舞臺上の場面のようになり、客體化されて提示されるのが普通である。」と述べている。この「視點の所在」という觀點に基づき、兩者の詩を捉え直してみたい。

顧非熊の詩は古樂府ではないが、その構造及び内容上の性質は、古樂府系邊塞詩の傳統的なものといえよう。一詩全體は、作中人物である兵士の視點に貫かれ、兵士の心情を吐露する。句末二句に詠じられる嘆きと批判とは、兵士のみでなく更に主體を特定しない感情にまで擴がり、いわば讀み手とその感情を共有する。従って顧非熊の詩は、「三人稱」の視點から「客體化」された世界を詠じている、といえる。それに對して杜牧の「河湟」詩は、「出塞即事」と同様に邊塞を主題としながらも、その構造はやや異なる。詩中には作中人物が存在せず、作者杜牧の「一人稱的」な視點を通して描かれている。その他の、河湟を素材として詠じる詩においても、個別的、具體的な場面に即して詠じるゆえに、杜牧の視點から描かれているといえよう。

總じて杜牧詩における河湟は、その内側の世界から描くのではなく相對化されて、杜牧が杜牧の視點から、それも杜牧の心情を反映した

經世家の視點に徹して描かれているのである。

(4) 中晩唐という時代の中で

董乃斌「論中晩唐の邊塞詩」⁽²⁾は、中晩唐期の邊塞詩の特徴について次のように論じている。まず、その思想内容については、

由反映外患而深刻觸及內憂、從而尖銳地抨擊朝廷政治、對昏庸腐朽的統治者施以當頭棒喝、這乃是中晩唐邊塞詩在思想內容上最根本的特點。

(外患を反映し、深く内憂に言及することによって、朝廷の政治を鋭く論難し、愚昧で腐敗した統治者に對しては激しく猛省を促すという、これこそが中晩唐邊塞詩の思想内容における最も根本的な特徴である)

として、そこに「政治批判」の觀點があることを指摘する。

更にまた、愛國心の強い詩人の詩として、杜牧「河湟」と「早雁」(卷三)、及びその他の詩人の詩(賈島「代邊將」、雍陶「塞路初晴」等)を例に掲げ、

他們在詩中還常常表現出不惜以身許國、爲王前驅的可貴熱情、一旦這種熱情遭到冷遇、則又化爲滿腔憂憤傾瀉出來。…一方面、這些詩議論剖析、陳詞獻策的成份加重了、詩人們從各個角度、特別是就最高統治者的方針大計提了許多意見、使得邊塞詩明顯地加強了說理性。另一方面、由于邊疆現狀的危困、問題的棘手、前途的可憂、這些詩在一般邊塞詩通常的激揚昂奮之中又透出淒涼、悲哀乃至肅殺之氣。

(彼らは詩中で常に身を以て國に捧げ、君主のために先驅けとなるといふ貴ぶべき情熱を常に表現し、一度この手の情熱が冷遇さ

れる目に遭うと、滿腔の憂いや憤りをぶつけるのである。…一方では、これらの詩には議論と分析、進言と對策の獻上という要素が強まり、詩人達はそれぞれの角度から、特に最高統治者の方針・計畫に對して多くの意見を呈した、この事によって邊塞詩は明らかに說理性を強めたのであった。また一方では、邊塞の現狀の危機と問題の厄介さ、前途の憂いに困り、これらの詩は、普通の邊塞詩ならば通常昂揚していたのに對して、もの悲しく、痛ましく、ひいては寂寥とした雰圍氣を呈している。)

と述べる。まとめると、彼らの詩は①國家に盡くさんとする情熱、②社會狀況の議論分析による說理性、③現狀を反映した悲哀の情感を帶びており、杜牧はその代表的な詩人——というわけである。

確かに以上までに掲げた杜牧の詩には、右の點が窺われよう。ここで更に一步を進めて、①と②の點は、杜牧詩文が本來特徴とする要素と關わりがあることに留意したい。

①の情熱は、杜牧の豪の詩風と相俟って、高らかに詠い上げられている。また②の、特に說理性という點に着目すると、それは杜牧の代表作とおぼしき「赤壁」(卷四)、「題烏江亭」(卷四)といった詠史詩において、端的に表されるものである。正に「河湟」詩にも、詩の前半に詠史詩的な表現が含まれ、それがもたらす說理性が、後半部分の基調となる③の悲哀の情感とコントラストを成す効果を生んでいよう。異民族との戰爭が多發する時代を承けて、杜牧の關心はより邊塞に向かいやすくなった。この關心のもとに杜牧は邊塞を詠じ、それは豪の詩風や說理性等と相俟って、個別的・具體的な詩へと結びついていったのであろう。

六、異民族討伐の論策と、序としての詩

杜牧において、異民族討伐への情熱とそれに關する表述とは、實際の政治行動と密接に連動していた。

安史の亂以來唐朝を脅かし續けた回鶻ウイグルと吐蕃の兩民族は、武宗朝（會昌元年—六年（八四一—八四六））の頃に至ると、ともに内紛によつて衰退する。それを機に、武宗朝にて權勢を誇つた宰相李德裕は、その討伐に力を注いだ。

杜牧は、それ以前に勃發した政治事變「甘露の變」甘露の變（文宗大和九年（八三五））後には、それまで精力的だった政策の獻上を止め、政治問題への關心を失つたかのようにであった。しかし武宗會昌二年（八四二）に中央勤務「比部員外郎兼史館修撰」から黃州刺史（湖北省新洲縣）へ赴任すると、杜牧は再び異民族討伐という時事問題に關して積極的な表現を始めたのである。杜牧にはこのように、社會狀況と政情との變化に對して敏感に對應する側面があった。

次に掲げる黃州刺史在任期（會昌二年—四年（八四二—八四四））の長編古詩「郡齋獨酌」（卷一）には、異民族討伐を含めた經世家たる杜牧の理想が、力強くまた伸びやかに詠じられている。

（前の部分省略）

平生五色線 平生 五色線もて
願補舜衣裳 舜の衣裳を補わんことを願う
絃歌教燕趙 絃歌もて 燕趙を教え
蘭芷浴河湟 蘭芷もて 河湟を浴せしめん
腥膻一掃灑 腥膻せいざん 一に掃灑し

杜牧の邊塞を詠じる詩について

兇狼皆披攘 兇狼 皆な披攘せん
生人但眠食 生人 但だ眠食し

壽域富農桑 壽域 農桑を富ましめん
孤吟志在此 孤吟 志は此に在るも

自亦笑荒唐 自ら亦た荒唐なるを笑う

（常に天子を諫める文辭「五色線」を以て、その補佐をしたいと思つている。反亂する河北や河東の地を禮樂によつて教化し、吐蕃の占領する河湟の地を君子の徳で清めよう。侵入する外敵は皆な平らげ、反亂軍の藩鎮は全て潰滅したい。人民が専ら安心して生活し、天壽を全うできるような太平の世にして、農作を豊かにさせるのだ。そんな思いを一人詠じて志はここにあるのだが、これほどの壯大な願望には、自分でも荒唐無稽さをおかしく思う。）

また、「資治通鑑」卷二四六武宗會昌二年八月の條に「可汗帥衆過杷頭烽南、突入大同川、驅掠河東雜虜牛馬數萬…詔發陳…等兵屯太原…俟來春驅逐回鶻」（可汗は衆を帥いて杷頭烽の南に過ぎり、大同川に突入し、河東の雜虜牛馬數萬を驅掠す…陳…等の兵を發ちて太原…に屯し、來春を俟ちて回鶻を驅逐するを詔す）とある。「郡齋獨酌」と同じく黃州刺史在任期の長編古詩「雪中書懷」（卷一）では、この回鶻侵略の事件に觸れて、回鶻討伐への思いを次のように詠じている。

（前の部分省略）

北虜壞亭障 北虜 亭障を壞し
聞屯千里師 千里の師を屯するを聞く
牽連久不解 牽連 久しく解かざれば

他盜恐旁窺 他盜旁に窺はんことを恐る

臣實有長策 臣實に長策有り

彼可徐鞭笞 彼 徐かに鞭笞すべし

如蒙一召議 如し一たび召議を蒙らば

食肉寢其皮 肉を食らい其の皮に寝ねん

斯乃廟堂事 斯れ乃ち廟堂の事

爾微非爾知 爾微なれば爾の知るところに非ず

向來躡等語 向來 躡等の語は

長作陷身機 長く作る 陷身の機に

(回鶻が岩の番所を破壊し、朝廷は千里にも連なる程の大軍を駐屯させたという事を聞いた。その大軍が長らく守備を解かなければ、反亂する藩鎮が傍で隙を狙うことが心配だ。私には優れた策略があり、回鶻をゆるやかに制壓できる。私が一度朝廷から議論に招かれたら、回鶻の肉を食べてその皮に寝ることになるだろう。しかしそれは朝廷の決める事。お前(杜牧自身)は卑しい身なのだから、お前のつかさどるところではない。昔から身分を超えた發言は、久しく身を陥れられる畏となってきたのだ。)

詩中では「長策〔優れた策略〕」の献上を、身分違いの僭越な行動だと謙遜するが、却ってこの口吻には杜牧の自信が窺われよう。事實、この「長策」は、後に具體的な策略として献上されたのである。會昌四年九月、杜牧は黃州刺史から池州刺史(安徽省貴池市)に轉任し、そこで回鶻討伐の策略「上李太尉論北邊事啓」(卷十六)を李德裕に献上した。この策略こそは、「雪中書懷」に述べる「長策」に該当しよう。

但しその策略の具體的な内容は、杜牧独自の發想によるものではない。『魏書』卷三十五崔浩傳にみえる、崔浩が蠕蠕を討伐する際の策略を、ほぼ踏襲したものである。杜牧は黃州にて、その地への赴任を李德裕による左遷と見なして不満を懷く一方で、古典研究に勵む等の前向きな心境も持った。従って、黃州滞在期に歴史書から着想を得たのであろう。しかし杜牧はその「長策」を黃州任官期には奉じなかった。恐らく、以下に述べるような時宜を考慮したのではなからうか。

廻る會昌三年春、異民族の騷動とは別に、昭義節度使(山西省長治市)にて劉稹の叛亂が勃發した。杜牧は同年七月頃に、その策略を論ずる「上李司徒相公論用兵書」(卷十一)を李德裕に奉じた。『資治通鑑』會昌三年の條に「時德裕制置澤潞、亦頗采牧言」(時に德裕澤潞を制置し、亦た頗る牧の言を采る)と記すのに據れば、李德裕は杜牧の策略を稱揚したようである。

そうして叛亂が翌會昌四年八月に平定されると、杜牧は同じ月の内に李德裕へ「賀中書門下平澤潞啓」(卷十六)を奉じて祝辭を述べた。その直後、杜牧は黃州刺史から池州刺史に轉出する。そこで着任後、恐らくそう月日の經たない内に、今度は回鶻を一掃すべく、「上李太尉論北邊事啓」を李德裕に献上したのである。

書中で杜牧は、「古來より王朝が西域民族を攻撃するのは秋冬の季節であり、それが西域民族にとって有利な時期であるため、王朝側は敗戦していた」という崔浩の發言を踏まえ、回鶻の意表をついて來年の夏にこそ討伐すべきだ、と説いている。杜牧は、昭義の叛亂平定の氣運をそのまま回鶻討伐へ向けることを避けて、周到な準備を來夏までに積んでこそ、回鶻討伐を果たせるのではないかと期待したのである。杜牧はそれだけ眞劍に回鶻討伐を望み、また李德裕の政策への期

待から、時期を鑑みつつ建言したのだった。

このように、「長策」に言及する詩を著した後に、連動する形でその「長策」を實際に献上したことから言えば、「雪中書懷」詩は結果的に策略の「序」に相當しよう。杜牧において、詩作と實際の政治行動との両者が連動していることを示す、顯著な例だと言える。

河湟を詠じた詩についても、このような連動した關係を踏まえると、より理解しやすくなるだろう。つまり、同時期に騷擾の地であった河湟も、回鶻の詩と同じ意識のもとに、具體的、個別的な場面に即して詠じられていたのである。

なお杜牧のこの回鶻討伐に關する策略も、『舊唐書』卷一四七杜牧傳に「李德裕之を稱う」と記すのに據れば、李德裕に高く評價されたようである。そして更に李德裕は、杜牧の策略と前後する九月末に「論回鶻事宜狀」（『李文饒文集』卷十七）を献上して回鶻討伐を願いつた。但し評價されたはずの杜牧の策略が正式に用いられることはなく、杜牧は結局報われぬままであった。

七、結語

平生より軍略家としての自負を抱いていた杜牧は、その當時、異民族問題の對象となっていた邊塞に對しても、大いに關心を寄せていた。そしてその邊塞を、主題、または素材として、詩文に詠み込んだ。但し杜牧は、邊塞詩において際立った作品を残す「邊塞詩人」に當てはまらないために、杜牧が詠じた「邊塞」は、これまで十分に注目を受けてこなかった。

しかし、改めてその邊塞を詠じた作品群を見直し、杜牧の「邊塞」という題材（主題・素材）に向き合う際の描寫傾向、その表現態度に

杜牧の邊塞を詠じる詩について

ついて検討してみると、そこからは様々な事實が浮かび上がって來るのである。

まず杜牧の「邊塞」を詠じる詩には、杜牧の個性が反映された詩といわゆる漢魏六朝以來の傳統的手法を用いた邊塞詩とが併存し、それは杜牧自身の手によって截然と分けられていた。

このことは、杜牧作品集の編纂狀況が重要な鍵となる。すなわち、杜牧の個性が反映された詩は、自身の知友を求めべく後世に傳える作品を集めた『樊川文集』に收められていた。他方の傳統的手法を用いた邊塞詩群は、『外集』、『別集』に偏在して收録されている。この二集に收める詩は、杜牧が一度は除外した作品群である。とすれば、そこに偏在する邊塞詩とは、杜牧が遺すことを願わなかった作品群と理解されよう。この除外は、杜牧が樂府系邊塞詩の特徴たる「イメージされた邊塞」を描くことを重んじぬ故に促された、と考えられる。このような杜牧の詩作における志向と、それにまつわる思いは、邊塞を詠じた作品に着目してこそ、顯らかに浮かび上がるのである。それは「飲酒」「閑適」等といった他の題材からは、これ程まで明確には見い出されないだろう。

また、一般に邊塞詩は、閩中の女性が出征夫を案ずる閩怨詩的要素が強い。そうした邊塞詩が『樊川文集』に見えないこと、及び『樊川文集』『外集』『別集』中に、戦鬪の慘狀を描く詩が無いということ——この二點は、杜牧が主戰派たる事を傍證しよう。

では、杜牧が遺すべく選定した詩において、「邊塞」は如何に詠まれているのか。

杜牧が多用した吐蕃占領の地「河湟」という語を手がかりに検討すると、それは、①杜牧が杜牧自身の視點から、②具體的かつ個別的な

場面に即して描かれ、③異民族討伐の策略と連動する發想を持つ——という特色を有していた。「河湟」とは、軍略家を自負する杜牧にとつて常に關心の所在であり、詩文においても、奪回すべき政策の對象としてのみ詠じられていたのであった。

杜牧における「邊塞」とは、「懷古」「飲酒」「閑適」等と比べてみても劣らぬ、特別な意義を持つ題材である。すなわちそれは、杜牧の詩歌觀や詩人としての個性を明瞭に映し出す、その判斷基準としての意義を有しているのである。

注

(1) 杜牧の卒年に關しては諸説あり、未だに一定していない。ここでは、植木久行「杜牧生卒年論據考—許渾らの没年にも觸れて」(『集刊東洋學』68號、一九九二年十一月)に從う。

(2) 本稿で「杜牧の作品集」と記す場合、底本とする『樊川文集』所收の『樊川文集』、『樊川外集』、『樊川別集』を指す。馮集梧『樊川詩集注』所收の「樊川詩補遺」(『唐音戊籤』等からの補録)と「樊川集遺收詩補録」(『全唐詩』からの補録)は、該當作品が有る際のみ言及する。

(3) 王昌齡・周小立「試論中唐邊塞詩」(『唐代邊塞詩研究論文選粹』甘肅教育出版社、一九八八年五月所收)は、盛唐期邊塞詩は七言歌行が典型的詩型であったのが中唐に到ると短くなり、樂府の舊題を用いる近體詩が大多數を占め、短編の五言古詩もより増加したと述べる。

(4) 尹占華校注『張祜詩集校注』(甘肅文化出版社、一九九七年一月)所收「張祜繫年考」、及び前掲注1植木論文に據る。

(5) 前掲注1植木論文に據る。

(6) 但し詩の第三・四句が、白居易「失鶴」(『白氏長慶集』卷二十三)の第五・六句目と一字を除き重複する。佟培基編『全唐詩重出誤收考』

(陝西人民教育出版社、一九九六年八月)參照。

(7) 原文は次の通りである。「官爲駿馬監、職帥羽林兒。兩綬藏不見、落花何處期。獵敵白玉鏡、怒袖紫金鏡。田寶長留醉、蘇辛曲讓岐。豪持出塞節、笑別遠山眉。捷報雲臺賀、公卿拜壽卮」(官は駿馬の監と爲り、職は羽林兒を帥ゆ。兩綬藏して見わざず、落花何處にか期さん。獵して敵く白玉の鏡、怒りて袖す紫金の鏡。田・寶長く酔いを留め、蘇・辛曲げて岐を讓る。豪として持つ出塞の節、笑いて別る遠山の眉に。捷報雲臺に賀し、公卿壽卮を拜さん)。

(8) 胡可先「杜牧詩真偽考」(『杜牧研究叢稿』人民文學出版社、一九九三年九月所收)及び羅時進「丁卯集」與『樊川集』等各本重出互見詩考辨」(『晚唐詩歌格局中的許渾創作論』太白文藝出版社、一九九八年八月所收)に據り、許渾作品集に重出或いは他詩人の作と疑われる詩は省略する。『外集』・『別集』詩の詩型は『唐音戊籤』卷一杜牧の條に據る。本稿の底本と『唐音戊籤』本文との間に字の異同は見えない。

尚お①「并州道中」、②「偶題」二首、③「邊上聞胡笳」三首、④「邊上晚秋」、⑤「遊邊」、⑥「青塚」、⑦「秋夢」について、杜牧には邊塞へ到った行跡がないため、他人の詩ではないかとする意見がある。：繆鉞「杜牧詩選」(人民文學出版社、一九五七年七月)前言では①③④⑥、郭文稿「『樊川外集』詩辨偽」(『唐都學刊』一九八七年第二期)は②、吳在慶「杜牧疑偽詩考辨」(『杜牧論稿』廈門大學出版社、一九九一年三月所收)は③④⑤を疑問とする。また李立朴「許渾詩考辨」(『許渾研究』貴州人民出版社、一九九四年十二月所收)では②⑥を除く詩、羅時進同書「許渾詩補遺」では②を除く全詩を許渾詩と推測する。しかしいずれも他詩人の作品集に重出しておらず、實景以外の邊塞詩を否定するのは説得的とはいえないので、ここでは杜牧作品として扱う。

(9) 杜牧詩文の豪と艶については、愛甲弘志「杜牧の詩と散文——その兩者を支える創作基盤——」(『文學研究』80輯、一九八三年二月)等を參

照。

(10) 「答莊充書」(卷十三)にも、司馬遷の言を踏まえて「古者其身不遇於世、寄志於言、求言遇於後世也。自兩漢已來、富貴者千百、自今觀之、聲勢光明、孰若馬遷、相如、賈誼、劉向、揚雄之徒」(古の者は其の身世に遇わざれば、志を言に寄せ、言の後世に遇うを求むるなり。兩漢自り已來、富貴たる者千百なるも、今自り之を觀るに、聲勢の光明なるは、馬遷、相如、賈誼、劉向、揚雄の徒に孰若れぞ)と述べる。

(11) 胡可先「杜牧詩文雜考」(前掲注8書所收)に、裴延翰の叔父・裴休の中書侍郎任官期(宣宗大中九年(八五五)二月(十年(八五〇)十月)と指摘する。更に序から、四年前の冬に杜牧が病を得た事が分かり、逆算して大中十年と考えられる。

なお南宋・劉克莊撰『後村詩話』卷一に「樊川有續別集三卷、十之八九皆渾詩」とあり、南宋の頃『續別集』三卷が存在した。葛兆光「唐集瑣記」(『文獻』第二十二輯、一九八四年所收)は、『全唐詩』卷五二六にその殘部が收録されていると述べる。

(12) 前掲注11胡可先論文では、咸通十一年(八七〇)の皮日休「傷嚴子重詩序」(『全唐詩』卷六一四)に記す「餘爲童在鄉校時、簡上抄杜舍人牧之集、見有與進士嚴憚詩」の「與進士嚴憚詩」を『外集』所收「和嚴憚秀才落花」詩と指摘し、それ故に『外集』が八七〇年以前に編纂されたと推測する。また、現存の『外集』は、皮日休の見た『外集』と「集外詩」(『別集』序)等を混合して編まれたと述べる。

(13) 但しこの『外集』と『別集』には、その經緯ゆえ、他詩人、とりわけ許渾の詩が多く混入した。姚寬撰『西溪叢語』卷上に「世傳『樊川別集』爲杜牧之詩、乃許渾詩。渾有『丁卯集』烏絲欄上本者。唐彥猷家有數十首、皆『樊川外集』詩也」(世に傳うる『樊川別集』の杜牧の詩と爲すは、乃ち許渾の詩なり。渾に『丁卯集』が烏絲欄上本なる者有り。唐彥猷の家に數十首有り、皆な『樊川外集』の詩なり)と記す。

杜牧の邊塞を詠じる詩について

(14) 河湟という稱の狹義、廣義については、蘇鑿輝「唐宣宗收復河湟地區與三州七關的年代略論」(『唐代研究論集第一輯』新文豐出版公司、一九九二年所收)を参照。

(15) 『新唐書』卷二六下吐蕃傳及び、スタイン文書六三四二號に據る。

(16) 『新唐書』卷一四五元載傳に、「載嘗在西州、具知河西・隴右要領。乃言于帝曰：而田神功沮短其議：帝由是疑不決」(載は嘗て西州に在り、具に河西・隴右の要領を知る。乃ち帝に言いて曰く：而るに田神功は其の議を沮短し：帝は是に由りて疑いて決せず)とある。

(17) 『新唐書』同傳に「大曆十二年三月：下詔賜載自盡」とある。

(18) 『新唐書』卷二六下吐蕃傳に「憲宗常覽天下圖、見河湟舊封、赫然思經略之、未暇也」(憲宗常に天下の圖を覽るに、河湟の舊封を見て、赫然として之を經略せんとするも、未だ暇あらざるなり)とある。

(19) 繆鉞「杜牧年譜」(人民文學出版社、一九八〇年九月)會昌四年の條参照。但し引用される『資治通鑑』の記事が基づく李德裕「巡邊使劉濂狀」(『李文饒文集』卷十七)には、自注に「會昌五年二月二十三日」とあり、岑仲勉「李德裕會昌伐叛集」編證上」(『岑仲勉史學論文集』中華書局、一九九〇年七月)でも會昌五年二月と編年されるのに従う。

(20) 吳汝煜・胡可先撰『全唐詩人名考』(江蘇教育出版社、一九九〇年八月)杜牧の項に従う。

(21) 『新唐書』宣宗紀に「大中三年二月、吐蕃以棄：歸于有司」とある。『舊唐書』宣宗紀には「春正月」と記すが、『資治通鑑』卷二四八宣宗大中三年では二月の條に記す。ここでは『新唐書』及び『資治通鑑』に據る。

(22) 白敏中の他の宰相は、馬植、崔鉞、魏扶の三者である。但し新舊『唐書』宣宗紀及び『新唐書』宰相表に據ると、崔鉞と魏扶は大中三年四月に宰相に就任するが、馬植は四月には宰相を辭任しており疑問が残る。

(23) 『舊唐書』宣宗紀には「七月」と記すが、ここでは薛逢の詩題に「八

- 月初一駕幸延喜樓看冠帶降戎」(『全唐詩』卷五四八)と記すのに據る。
- (24) 自注に「時收河湟、且止三州六關」(時に河湟を收むるも、且く三州六關に止まるのみ)と記す。『樊川詩集注』は「止」を「立」に作る。『資治通鑑』大中三年の條には、七關のうち、六月に六關を奪回し、七月(『舊唐書』宣宗紀では、六月の後日)に残る蕭關を奪回したとあるので、六關奪回後、蕭關奪回までの間に著わしたことになる。
- (25) 但し例外的に『外集』にも「河湟」の語が見える。第四節所掲「中丞業深韜略、志在功名、再奉長句一篇、兼有諍勸」である。この詩はおそらく裴延翰の手元になく、流出していたところを『外集』に収録されたのではないか。というのも延翰の手元であれば、己の父と杜牧とを繋ぐよすがとして、この詩を『樊川文集』に收めたと思われるからである。とすれば「河湟」とは、やはり「別集」、『外集』所收詩には用いられない方向性にある語、と位置づけられよう。
- (26) 『中國詩歌原論—比較詩學の主題に即して—』(大修館書店、一九八六年四月)所收。但し新樂府における「視點の三人稱化・場面の客體化」の機能は、「古樂府系統のような統一的な状態にはない」と述べる。
- (27) 前掲注3書所收。
- (28) 杜牧と「甘露の變」との關わりについては、拙論「杜牧「昔事文皇帝三十二韻」について—その制作意圖をめぐって—」(『中國文化—研究と教育—』第五九號、二〇〇一年六月)及び、「杜牧における「甘露の變」—李甘・李中敏との交流を通して—」(同誌第六〇號、二〇〇二年六月)を参照されたい。
- (29) 傅璇琮『李德裕年譜』(河北教育出版社、二〇〇一年十二月)四二九頁は、「上李太尉論北邊事啓」の文中に「今者…年穀豐熟」と記すのに據り、秋冬の間に著わしたと指摘する。
- (30) 松尾幸忠「黃州時代の杜牧—「艶」なるものの内在化—」(『中國文學研究』第十五期、一九八九年)では、杜牧の黃州時代を「古典の研鑽と經世への積極的な取り組み」と述べる。
- (31) 前掲注29傅璇琮書三七八頁は、「李司徒」の稱から、李德裕が司徒を拜する六月以後、かつ杜牧の戰略上から八月前として、七月頃の作と推測する。
- (32) 但し前掲注29傅璇琮書三七九頁では、實際は杜牧の上奏以前に李德裕の戰略が決まっていたとし、更に兩者の戰略に相違があることから、『資治通鑑』の記事を誇張した表現であると述べる。待考。
- (33) 李德裕はこの功績によって太尉を拜した(『新唐書』卷一八〇李德裕傳)。これは『新唐書』武宗紀によると「八月戊申」(二十八日)のことである。杜牧の題には「太尉」の稱がないが、次いで奉じた「上李太尉論北邊事啓」では「太尉」と稱することに據り、李德裕の太尉拜命以前と見なす。
- (34) このように複雑な杜牧と李德裕との關係については、稿を改めて論じたい。